天蓋のパルテノン

音風 奏 （雅董杏みつ）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
天蓋のパルテノン

【Ｎコード】
Ｎ６８７１Ｚ

【作者名】
音風　奏　（雅董杏みつ）

【あらすじ】
幼馴染みとの、若干変だが平凡な人生を過ごしていた俺。
片思いの人との、平凡だけど変な人生を過ごしていた僕。
二つの運命が交錯したとき、俺達の世界が変わった。
二人の人生が重なったとき、僕達の戦いは始まった。
神の力を操り、神へと近付く俺達。
神に選ばれて、神同士で戦う僕達。
その先の結末は、神のみが知る。

開封／不在

α

「はい、リンくん」
幼馴染みの涼子の家の玄関で、彼女から渡されたのは、小さな箱だった。
「ありがとな。……これ、今あけても？」
「うん、もちろんいいよ」
一度彼女の許可を得て、その包みを丁寧に開ける。と、
「おっ、コレは……？」
金色のネックレスのようなものが、その中の小さな箱に入っていた。箱が透明な作りになっていて、それを開けなくても中身が分かるようになってる。
「えへへ、リンくんがオシャレに興味ないのは知ってるけど、こういうのもたまにはいいかな、って……」
そういう涼子の言葉を聞きながら、俺はそのネックレスをじっくりと眺めてみた。……これ、どう見ても安物じゃないぞ……？
「お前これ、どこで？」
俺がそうきくと、涼子は
「ないしょ」
とだけ言って、ちろっと舌を出した。
「改めて、お誕生日おめでとう」
……そう。今日は俺の誕生日なんだ。高校一年生になってもう半年ほど経って、比較的過ごしやすい気候である今。俺はこれで十六度目の誕生日を迎えたのだ。
「ああ、ありがとな」
相変わらず、何があっても俺の誕生日には必ずそばにいてくれる彼女を見て、俺は自然と顔が綻ぶ。……不思議な話だが、それまで

三日間ほど音信不通だったのに、今日ここで会えたというだけで、彼女はこれからもずっと俺のそばにいてくれると思っている。根拠はなくても自信はある。その自信がどこから来ているのかは、俺にもわからないがな。

涼香は俺の顔をみて、満足そうな笑みを浮かべた。

「じゃあ、今日は遠慮しないでどんどん食べてね！」

そして、その場から体をずらして、俺をその奥へと促した。

と、

「うぉっ！？」

そこには、テーブルを埋めつくほどの大量の夕食が用意されていた。涼香独特の形をした唐揚げに、色とりどりの野菜サラダ、光沢でも持ってるんじゃないかと思うほどに輝くデミグラスソースがかかった、目を疑うほどきれいに焼きあがっているハンバーグなど。それら全てが、俺と涼子の二人分、置かれている。

「……これ、全部お前が？」

料理が得意なのは知っていたが……。

「えへへ、はりきっちゃった」

いや、はりきったとか言うレベルで済むモノか、これは？　世の中見た目より中身というが、中がよければ外もいいとう事もあり、これはどうみても後者の部類だろう。彼女の料理が美味いのは俺の舌がよく知っているが、それ以前にもう見た目だけで充分に美味そうだ。

「今日は、ほかに誰もいないからね。わたし、ちょっとがんばりすぎちゃったかも」

親同士がとても親密な仲にある俺たちは、毎年片方の家族の誰かの誕生日には、二家族合同で盛大に誕生日会を行うのがルールになっていた。が、涼子の両親は仕事の急用でどこかに行ってしまったし、俺の両親と妹も、妹の塾の合宿に参加している。ので、今年は俺たち二人だけなんだ。

それにしたって、この量とクオリティはあまりにも豪華すぎる。

とは思うものの、俺はどちらかというとそんなことより、彼女のその行為自体がとても嬉しかった。俺のためにこんな用意をしてくれた彼女に対する感謝の気持ちが、俺の中からあふれ出そうなくらい、嬉しかったんだ。

だから、

「すげぇ！　マジですげぇよ！　ありがと涼子！」

なんかこう、つい興奮してしまうのだぁ！　うえーい！

「これ、俺のために作ってくれたんだろ？」

「もちろん、そうだよ」

興奮という名のジェットエンジンに火が付いた。

「うはっ！　涼子、マジでありがと！」

俺はたまらなくなって涼子の手を握り、彼女の目を見つめる。やべぇ、笑顔がとまらん！　どこぞ変態みたいだ。が、いまはそれよりメシだ！　うほぉぉお！

「リンくん……。えへへ、嬉しいなぁ」

涼子が照れた。頬を赤らめるとその顔がリンゴみたいで、でもそんなことよりやっぱり俺はメシに目が行ってしまい、

「んじゃ、いただきまーす！」

勝手に椅子に座り、箸を取った。さあ食べるぞ！　うおぉ！

「あっ、リン君、先に乾杯を――」

「（ごっくん）うんンンンめぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！　最高だ！」

「……まぁ、いっか」

涼子のうますぎるメシを平らげた俺は、しばらく涼子と駄弁ったり、一緒にテレビゲームをしたりして、気が付けば、日付の変わる一時間前になっていた。

よく考えれば涼子に誘われたのは七時前で、つまり四時間以上もお邪魔していたわけだ。楽しい時はすぐ時間がたつものだと改めて

思う。
流石に日を跨ぐまでお邪魔するわけにも行かないので、俺は涼子宅を後にした。涼子は最初、「一人は怖い」と言い出して俺の帰宅を拒んでいたのだが……。
「うわー、久しぶり」
成り行きで、同行することになってしまっていた。
「リンくん
の家に来るの、半年ぶりかな？」
俺の懸念もいざ知らず、彼女は無邪気に俺の家を眺める。……四人家族が暮らすには丁度いいってだけの、ただの一軒家なんだがな。
って、そんなことはどうでもいいんだ。問題は、
「お前、ホントにウチで泊まってくつもりか？」
彼女が、俺の家で泊まっていくつもりでいることだ。
「だって、リン君帰っちゃうし、わたし、一人でお留守番するの怖いし……」
彼女が少し引っ込み思案気味で心の弱い子ということは知っているが、まさか高校生にもなって一人で留守番が怖いとは……。女の子なのだから仕方ないと言ってしまえば話は早いが、今時の「女子」というのは怖いどころか、自宅に一人でいることを幸福とする奴が大多数だろう。だからむしろ、所謂「女々しい」という言葉に当てはまる女の子のほうが、圧倒的に少ないんだ。このご時勢は。
だからこそ意外なのだ。
「いっそ、俺が涼子の家に泊まればよかったかもな……」
なんて呟く俺だが、今更もう遅い。俺は家の鍵を開けて、涼子を中へと促す。もう仕方がないからある程度のワガママは聞いてやってもいいと思ったのは、さっきの料理のせいかもな。
まあそれでも、悪くないさ。

抱擁／殺害（前書き）

ここから少々残酷な描写が出ます。というか、今回は濡れ場（！？）とハイパーシリアスが書かれているので、気持ちを切り替えて読まないと大変なことになります。あしからず。

が。
流石に同じ部屋で寝ろと言われるのは、予想外だった。
俺が襲うわけないと信じてくれているのは嬉しいが、俺だって一介の男子高校生だ。隣で寝ているのが年頃の女の子だと分かっていると、心臓が高鳴ってロクに眠れない。
持参したパジャマを纏う彼女は、とても無防備でかわいらしい寝顔を俺に見せつけるような角度で眠っており、俺はそれをイヤでもじっくりと見てしまうわけだ。……ってか、高校生にもなってまだ、こんな子どもっぽい薄手のパジャマ着てるんだな、涼子。
ちなみに、もともとここ、つまり俺の部屋は、布団二式を引くには少し手狭だ。よって、いくら眠る布団が違うとはいえ、実際のところは隣同士であり、手を伸ばせばそこには、涼子の艶かしい女体があるのだ。いくらなんでも平常でいられるわけがないだろう。
……まあ、涼子の体が艶かしいとはいえないか。どちらかというとスレンダーというやつで、出るトコはそんなに出ていない。って、そんな視点で幼馴染みを見る俺もどうなんだかな。男だから仕方ないだろう。
「（すー、すー、すー）」
俺がこんな状態だとはつゆ知らず、可愛らしい顔で寝息を立てる涼子。そんなに近くに彼女がいることを、あらためて自覚して……。
――やべぇ、超かわいい。
いままで彼女を恋愛対象に思ったことがないといえば嘘になるが、それでも最近はほとんど気にならなかった。
が、今になってまた思う。かわいい。
もともとそれなりに整った顔立ちなのだから仕方ないが、その無防備な寝顔というのが俺の心を擽っているのだろう。重要なのは「

無防備」ということだ。
――やべぇ、本気で襲いたくなってきた。
襲うといってもそんなにひどいことじゃない。ただちょっと体に触りたいというか、その愛くるしいものが傍にあるのを感じたいというか。だめだ、冷静になれ俺！
――でも、ちょっとだけならバレないんじゃないか？
よく考えれば彼女は眠っているわけだし、多少つついても起きないのではないか。気付いてしまった。
だめだ。この邪念を止められん。
遂に俺は、その右手を彼女のものへと伸ばしてしまった。ああ、愛くるしい我が女神よ、その麗しの肌を少しだけ、俺の手に――、
「……うん……？」
――っ！？
肌に触れかけた俺の手を、勢いよく引っこめる。マズい、気付かれたか！？
「……あっ……リン、くん……」
目が半分開いている。これは――終わったな。ありがとう俺の人生。ありがとう、父よ母よ妹よ。
風のうなりに血が叫び、力の限りぶち当たるとでも言わんばかりの勢いで、彼女の手が伸びてくるように見える。パンチか？　ビンタか？
「いただき……ます……（きゅむっ）」
――は？
なんだこの暖かい感触は。伸ばされた手が俺を引っ張ったかと思うと、痛みのかわりにその感触が、俺の全身を包みこんだ。
「おいしいなぁ……」
まってくれ。頬に触れるこの柔らかなふくらみは何だ？　なぜ彼女の寝息が、俺の額に当たっているんだ！？
「リンくん、大好き……だよ……（ふにょ）」
「――っ！？」

なんか、柔らかなふくらみに俺の頬が押し付けられてる！　いつの間に後ろに手をまわしたんだ涼子！
そして、ふくらみからは優しくて、甘いにおいがする。何があったんだ涼子！　お前は一体何をしているんだ！？
「ねぇ……結婚してよぅ……（むぎゅっ）」
……。
……アレ？　メノマエニ、オハナバタケガミエルヨ？
――って！　やばいぞ！　今一瞬意識が飛びかけた！
「こんなに、愛してるのにぃ……。いつもアピールしてるのにぃ、どうして気付いてくれないのぅ？」
わーっ！　やめろ涼子！　俺を無理矢理抱きしめようとするなァ！
なんか。そういうのはギリギリアウトだよ！　俺の心情的にも！
「あんまりニブいとぉ……オカしちゃうよぉ～！」
「やめろぉぉぉォォォォォオオオオオオオオ！」
服を脱がされそうになった俺は、ヤドカリのように服を捨てて、慌てて布団から飛びだす！そのまま扉を開け放ち、全力で廊下へと飛び出した！

β

「もう、やめにしないか？」
空き教室で、僕はその刀を手にした。
「こんなことしても、何にもならないよ……」
日本刀「天叢雲（あまのむらくも）」の切っ先を地面に引きずらせながら、歩みを進める僕。その先には、僕がずっと憎悪を抱いていた対象が、驚愕という言葉以上の驚きに満ちた顔で僕を見ている。
「な……なんだお前……、じょ、冗談だろ……？」
「冗談……？」
その言葉は、僕の心を失わせるのに効果覿面だった。

「君が彼女にしたことは、それで済むのかい？」
僕はこの時既に、心を失っていた。これは僕の回想であり、この文は、僕の心が落ち着いた時に綴った物だ。
「オレはただ、生意気なコイツに――、」
だから、
「口を開くなぁっ！」
このときの僕は、何も思うことなく、その切っ先を彼に向けることが出来たんだ。
「ひいっ！」
涙目になっている彼に、このときの僕はどんな風に見えたのだろう。鬼、悪魔、怪物、バケモノ……。
なんでもいい。
「お前のその口で、彼女がどれだけ傷ついたのか……分かっているのか！」
切っ先を向けた天叢雲を持つ右手首を回して、切っ先で夕日を反射させる。
「僕は、彼女を傷つけた君を許さない……。許さないんだっ！」
僕はその刀を天井に向けて、一歩前に出る。そして、それを振り下ろした。
それとは、「天叢雲剣（あまのむらくものつるぎ）」。かつて大自然を司っていた神「天照大神（あまてらすおおみかみ）」が齎したもので、それは現代までずっと、御神体として祭られていたものだ。それか今回の戦争で、どういうわけか僕の手に降りた。それまで武器として使われることのなかった天叢雲のもつその能力は、「持ち主の任意で対象物を空間ごと引き裂く」というもの。
このときの僕は憎悪に満ちていて、それはこの時目の前に向けられた彼に対するものだった。憎しみで我を忘れた僕は、怒りで彼を「敵」として認識してしまったんだ。
――そして。
「……え、あ……――」
――もう、そこには彼の姿はなかった。ただあったのは、天叢雲

によって斬り裂かれた後の二つの肉塊だけ。
大量の赤い液体が、あたり一面に飛び散った。僕の体にもその一部が付着し、僕の学生服が真紅に染まる。
斬撃よってズレを生んだ空間が元に戻り、その際にその肉塊は空間の歪みに飲み込まれ。消えていく。
「はぁっ……はぁっ……」
そこでやっと、僕は我に帰った。右手に握った天叢雲を手放し、両手のひらを見る。真っ赤だ。彼の返り血で。
「うっ……」
強烈な吐き気を覚えた僕は、すぐに嘔吐した。
そしてすこしして、比較的落ち着いたとき。
そのとき初めて、僕は自分が何をしたかを理解した。
「……や……っちゃった……？……………」
手から落ちていた天叢雲が視界に入り、その真紅に染まった刃と、しかし刃こぼれなど微塵も感じさせない光りを放つ全体が、より僕に、事実を強く焼き付けた。
全ての行動を思い出し、狂乱して。
「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁあああああああああああ！！」
理解した。
僕はこの時(いま)、自分の同級生をこの手で殺したんだ、と。

決意／邂逅

そして、今に至る。
「セイジ、泣かないで」
僕がそれを思い出していると、その横にいたアラルが、僕の涙を小さな手で拭ってくれた。
「わたしがわるいの……。わたしが……」
「それはちがうよ、アラル」
僕がこの件について涙を流すと、そのたびに彼女を傷つけてしまう。分かっているのに泣いてしまうのは、僕が優柔不断だからなのかな。
「僕の心が弱いから、僕は泣いたんだ。……ごめんね」
「そんな、だったらあやまらなくても……」
「ううん、ごめん。僕は謝らないと、自分を保てないんだ」
自分で自分が嫌になるよ。なんで僕みたいな弱い人間が、こんな現実を歩んでしまったのだろうか。
……いや、それはもう考えないでいよう。何度も考えたし、そのたびに泣いた。もう、泣くことに僕への慈悲はないし、そもそも考えたところで答えなんて出ない。
「行こうか、アラル」
「うん……」
考えたところで、僕の人生に変わりはない。もちろん、運命が変わることも。
だったら、戦うだけだ。
「次は、ブリューナクだ」

α

……。
……
「――はッ！　俺は何を……？」
気が付くと俺は、抹茶を淹れていた。母親が茶道教室をやっている影響か、無意識のうちにシャカシャカシャカシャカシャカ……。どうしたんだ俺。
ふと見ると、ここはリビングだった。涼子が来る前は食器で散らかっていたシンクが、買った当時と変わらない光沢を放っている。
……無意識のうちに、家事をしていたようだ。
「ああ……、だから俺は「変わってる」とか言われるんだよなァ……」
今時、無意識に家事をする男子高校生がどこにいよう。……まあ、ここにいるんだけどな。
「でも、いいことだと思うよ？」
「え……そ、そうか？」
「うんっ。かっこいいよ！　ひゅーひゅー！」
「いやァ……、そんな……、たいした事ではないザマスよ……」
おっと、つい親父の口癖が。
――って、そっちじゃねぇ！
「っ！　誰だ！？」
誰か、俺の近くにいる！？
「あ、こんにちわっ」
そう思って見渡してみると、そこに小さな女の子がいた。
「わたし、太陽弾タスラムって言うの。よろしくねっ」
「ぅえ？　あ、ああ、よろしく……」
本当に「小さな」女の子だ。体のサイズはアクションフィギュアほどで、全長約十センチ足らず。しかも宙に浮いている……。
「……」
よく考えてみると、絶句した。なんだこの生き物は。小人？　い

や、浮いてるから……妖精？
「お前、いったい……」
少しして、俺が二の句を告ごうとすると、
「わたしたちは、妖精少女（ヴィレイナス）」
「あっ、ブリューナク！」
「っ！？」
目の前にもう一人、小さな女の子が現れた。
「次期戦女神決定戦（バルテノンウォーズ）の参加を義務付けられた、武器の妖精」
「そうそう」
ぱ、ぱるての……、
「ちょ、ちょっと待ってくれ」
不思議なワードを沢山聞いた気がする。なんだそれ。それとこの二人はどういう関係なんだ？
「何なんだ、お前達は？　そもそも、これは一体どういう現象なんだ？」
意味が分からん。さっぱり意味が分からん。
しかし俺のそんな様子をよそに、後から現れたほうの小さな女の子は、
「わたしたちは、妖精少女。次期戦女神決定戦の参加を義務付けられた、武器の妖精」
同じことをいいやがった。
「そうじゃなくてだな。……えっと、悪いが一から説明してくれ。今の俺には、お前達が何を言っているのか分からん」
俺はそう訴える。だが、
「わたしたちは、妖精少女。次期戦女神決定戦の参加を義務付けられた、武器の妖精」
「いや、だから一から説明を……」
「当初から、一から話してる。わたしたちは、妖精少女。次期戦女神決定戦の参加を義務付けられた、武器の妖精」
会話がかみ合わない。

「じゃあ、ゼロからの説明をしてみてくれ」
ちょっと言葉を変えてみた。さすがにもう同じことは言わないだろう。
「ゼロからと言われても困る。ゼロとは無。無の存在を認識するには無しかなく、故に無以外の言いようがない。概念上の問題」
が、なんと小難しいことを言いやがった。
「わたしたちは、言語以外の方法で人間とコンタクトすることは出来ない。故にわたしにはあなたに、この思考的概念を理解へと導く術を持っていない」
……うむ。これは日本語なのだろうか。だとしたら、コイツは広辞苑でも暗唱しているのか？
「よってわたしは、あなたにゼロを説明できないと、ここに確信を持って断言できる」
そして、そう言って一息つく彼女。そこに、それを隣で聞いていた、先に現れたほうの小さな少女が、
「あの、ごめんね。ちょっと無愛想に聞こえちゃったかもしれないけど、ブリューナクは悪くないの。彼女はちょっと……人と触れ合うのが下手で……」
「不得手ではない。わたしがそうしたくないだけ。手段としては心得ている」
「……『下手じゃなくて、わたしはそうしたくないの。やろうと思えばできるよ』……？　だったら、なんで？」
「……感情的問題。個人的に深く振り下げられることを拒否する」
「……ふぅん……？」
……そして、俺は置き去りである。
その後も、二人でなにかひそひそと呟きあいはじめた。俺はその様子を見つめなていたが、やがて耐えかね、罪悪感はあるものの、口を開いてみた。
「……えっと、俺はどうすればいい？」

すると、先に来たほうが慌てたように振り返り、
「あっ、えっと……わたしが説明するね」

仲間／伝言

β

次期戦女神（パルテノンウォーズ）決定戦。

僕がアラルとであったキッカケは、この単語だった。

それは、アラルのような妖精少女（ヴィレイナス）を女神にするための戦争で、僕達はその手伝いをする役割にある。彼女たちが母体としている武器を操って戦い、負けた者のヴィレイナスは女神の候補から脱落する。

そうして、最終的に勝ち残った一人の妖精少女が、次の女神になるんだ。

そして、その妖精少女のパートナーとなっていた人間は、絶対神の持つ全知全能の力の一部を手に入れられる。事実上の神になれるんだ。

つまりコレは、文字通り「神」になるための戦いなんだ。

「僕は、死んだ妹を蘇らせたい。だから戦うのさ」

そうして、僕は目の前の少女にそれを告げた。

「ふえぇ…、それが星次の本心だったんだ」

その少女とはアラルではなく、僕の正面でチョコレート菓子を食べている、同年代の女の子。

「がう、あたしてっきり、腐った世の中に復讐するんだとか、そんなことを言い出すかとおもったよ」

赤いチャイナドレスを身に纏い、後ろ髪をリボンで束ねた女の子。

「アンタもいろいろ、大変なんだね」

頭屋わかほ。僕の親友であり、同志だ。

「だからって、神になることを譲ってはくれないだろう？」

「当ったり前じゃんっ、あたしだって、もとの時代に帰りたいのさ」

彼女は僕とは生まれた時代が違う。何かが起きて、彼女は千年以

上も昔からやってきたんだ。その理由は分からないけど、彼女は自分が生きていた時代に帰りたがっているのは確かだ。
「でも、どっちかが神になれば、なれなかったほうの願いを叶えてあげるんだよね？」
「うん。それが、僕らの協定だからね」
「それなんだけどさ、」
彼女は「がう」と言って、一拍おいた。ちなみに、彼女が事あるごとに「がう」というのは、ただの口癖だ。
「アンタはさ、あたしが裏切るかもしれない、って考えないの？」
……おかしなことを訊くね。
「それは僕も思ってることさ。君だって僕を信じてくれてる」
そういうと、彼女は「がう、そうだけど……」口ごもる。
「それでいいんじゃないかな？　裏切るのには理由が要るけど、信じるのに理由はいらない。それでいいのさ。……そう思えば、こんな世界でも優しく見える」
でまかせに言った言葉だったけど、彼女の心に響いたようで、
「がう、なんか、ここがあったかくなるね……」
そう言って、自分の胸を右手で押さえていた。この場合の「がう」は、肯定の意思だろう。それぐらいは付き合いの長さで分かる。
「おっ、めずらしくセージがいい事言ってんじゃねぇか」
そんな中、わかほの耳から、彼女とは違う別の声が聞こえた。
「キコイ！　「めずらしく」は余計だよ！」
その言葉にいち早く、それまで黙っていたアラルが反応する。と、わかほの耳から、彼女のパートナーの妖精少女であるキコイが、その中から出てきた。
「おー、アタイの予想通りの反応だなぁ。いつまでもラブラブなこった」
「そんなんじゃないもんっ！」
「おー、こわいこわい」
ぷくっと頬を膨らますアラルの前で、降参だというかのように両

手を広げるキコイ。
「まあ、なんでもいいよ、あたし」
そこで再び、わかほが会話に参加してきた。
「でもキコイ、あんまり茶化しちゃだめだよ？　あたしが星次と気まずくなっちゃうからさ」
「まあ、マスターがそう言うなら、アタイも別に楽しくもねぇし、止めっけどよ」
「じゃあ最初からやめてよっ」
三人が会話を進める中で僕はというと、我ながら恥ずかしい事に、何も言えないでいた。アラルがそういう感情を抱いてなかったら話は別なんだけど、実質彼女から好意じみたものを感じることもあって、下手に発言すると彼女を傷つけかねないと思ったんだ。
そう、僕が自己分析していると、
「がう、じゃあ、」
わかほが立ち上がった。
「あたしそろそろ、買い出しに行ってくるよ」
「あ、うん。言ってらっしゃい」
僕がそういうと、わかほは「キコイ、行くよ」と言ってキコイを呼び寄せ、彼女を武器の姿に変える。
如意金箍棒。通称「如意棒」。
中国の伝説「西遊記」で、孫悟空が使用したとされる伸縮自在の棒。もともとは武器として使われなかったものを、孫悟空が武器として使うようになり、以降は多くの人に武器として認識されるようになった。
刃や銃口などといったものがない純系の「打撃系武器」で、漢流武術を得意とするわかほとは愛称抜群の武器なんだ。
その長さはわかほの背丈ほどで落ち着き、その柄が金色に光る。
「ついでに、ブリューナクをさがしてみるよ」
そう言って、わかほは窓から飛び降りた。
「あばよ、ラブラブカップル！」

「なっ……！　ちがうもんっ！」
キコイ……。微妙な空気を作っていかないでよ……。

α

『
あっ、なにこれ、もう撮ってるの？　もー！　早く言ってよタスラム！
あ、えっと…こほんっ！　そこの人間さん、はじめまして！　現役の戦女神、アテナ一世です。
今回あなたには、「次期戦女神決定戦」というものに参加してもらう事になりました！　おめでとう！　この……ビデオって言うのかな？　とにかくコレを見ているあなたは、そこの太陽弾タスラムに選ばれ、妖精少女使い（ヴィレイナスマスター）として戦う使命を科せられました！　私から！
具体的にどうすればいいかって言うとね、その子を使って、他の妖精少女使いを倒すの。ガチで戦って、勝ち抜いて、最後まで勝ち抜いた一人の妖精少女が、私にかわって次の「アテナ」になるの。そういうこと。
……え？　あなたへの見返り？　勿論あるよ！　最後まで勝ち残った妖精少女使いは、私の父親「ゼウス」から、ちょっとだけ全知全能の力をあげる！　ちょっとって言っても父様の力だから、その気になれば世界征服とかでも出来ちゃうんだよ！　使用回数の制限もないから安心ね！
そんなわけで、頑張ってね～～……
』

「うん、こんなかんじ～」
こんなかんじ～、だ、そうだ。

誤解／制裁

「ふむ」
よし、頬を抓ろう。……痛ぇな。夢じゃないのか。
「というわけで、お願いします」
ぺこりと頭を下げる、小さな少女。
「だが断わる」
「えっ？」
タスラムと称していた彼女は、俺の言葉にそう反応した。
「そりゃあ、いくら見返りがあるとはいえ、何のとりえもない一般人が、いきなり「戦争をしてくれ」って言われて「ええいいですよ」なんて言う訳ないだろう？」
そんなことを言うやつがいるとすれば、そいつは用兵か、もしくはヒーローへの憧れとか好奇心とかで賛成する愚直な奴だ。
前述したが、俺にはとりえはない。まだ舞踊系統の習い事をしていたりすれば、団体ヒーローみたくダンスや新体操を模して戦えるかもしれないが……。
「そういうわけで、他人を当たってくれ」
そう言って、テレビの前から移動する俺。いままでタスラムともう一人の小さな少女によって渡されたビデオテープ見ていたが、その内容が先ほど述べたものであり、俺には関係ない。
と、思ったんだがなァ。
「待って（ごっ）」
「うおっ？　あだ！（ごつん！）」
俺は足元で何かにぶつかり、派手に転んでしまった。
「いてて……」
俺が頭を抑えながら足元を見ると、タスラムではないもう一人の小さな少女が、俺の足をつかんでいた。こいつに躓かされたのか？
「理解力の無い人間は嫌い。ビデオをちゃんときいてたの」

顔が疑問系だというのに、その声色は断定的だ。無愛想な奴だとは思っていたが、これほどとは……。
「アテナ様は一度も任意的表現を使っていない。よって、あなたに選択余地は無い。事実上不可能なので自分勝手でしかない事を言っても、現実的意味として現状を変えることは無い」
「えっと、『アテナは一度も「なってもいいよ」とは言ってないから、あなたが決めれることじゃないの。できないことを言われても、何も変わらない』……。ちょっと言いすぎだよ、ブリューナク」
こいつ、ブリューナクという名前か。以後はそっちで称そう。
――いや、それよりも、
「選ぶ権利はない、ときたか」
なんともまあ、不条理というか……そんな話だ。
「めんどくせぇなァ……。じゃあアレか？　俺はお前らを使って戦うための、お前らが神になるための前座でしかないってか？」
「そ、それは違うよ」
「否定はしない」
二人して言ってることが真逆なのだが。
「ブリューナク、　その、なんか無愛想な言い方、やめようよ」
「善処する」
「えー……」
……ふむ。まあとりあえず、現状の整理をしよう。
俺はなんか、こいつらと戦って勝ち進んで、こいつらを神にしなくてはいけないらしい。しかも拒否権なし。……こんなところか。わりとあっさりした内容だな。言っていることは以上だが、それにしたって異常すぎる。例えるなら、上司からから無茶な仕事を押し付けられているようなものだ。仕事とは違いそこには使命感もクソもないのだから、余計にタチが悪い。
「……んで、」
と、俺をそっちのけで会話する二人の間に割って入――
「がおーっ！　見っけ！」

――れなかった。突然リビングの窓から、変な少女の顔が飛び込んできた！
「ブリューナク！　今度こそあたしと一緒に来てもらうよ！」
靴を履いたままリビングに上がろうと、窓のレールを飛び越えて、
「え！　あれーっ！」
真下にあったシンクに落ちた。
「がっびーん！」
へんな格好で尻を押さえる少女。……よし、とりあえず。
「バカか……」
と、言ってみた。すると少女はその言葉を聞いて俺をキッと睨んで、
「ふんっ！　バカって言うほうがバカなんだよーだ！　バーカ！」
……何故だろう、ツッコむ気にもならない。
「とりあえず、お前、大丈夫か？」
なんか、ずっと尻を押さえていてかわいそうにおもえて、俺は彼女に近付く。が、彼女はそんな俺をどう見たのか、急に体を起こして、
「がぅ！？　さては弱ってるあたしを襲うつもりだな！　あたしがかわいいから！」
「いや？　全然全くちっともそんな気は起こらん」
まあたしかに、正直ちょっとかわいいかもなんて思ったがな。ちょっとだけさ。
「がっびーん！　ハッキリ言われたぁ～！」
やましい気持ちが起こらなかったのは確かだ。
「――って、アレ？」
落ち込んだ少女は、すぐに俺とブリューナクの顔を見比べて、
「まさか、キミがブリューナクのマスターに？」
切り替えが早いな。そして、その認識は違う。
俺がそう言おうとして、
「……（ギュッ）」

「ん？」
俺の右腕が、とても小さな力で握られたことに気付いた。ブリューナクが、その小さな手で俺の腕握っている。
「……たすけて、マスター」
「や、俺まだマスターとかになるつもりじゃな――」
「やっぱりそうだったんだ！」
うぇ、なんか誤解された！？　そう思う俺の傍ら、
「そう、この人間、九条凛人が、わたしたちのマスターなの！」
タスラムが、ブリューナクのように左腕を握ってそう言った。
「だから違ぇし！」
反論する俺。
「……え、違うの？」
「ああ、違う違う！」
「やーん、マスターわたしたちを売るつもりー？」
「言い逃れは出来ないと思う」
「がうぅ！　あたしを騙したな！　許さないぞ！」
……なんだ、この展開。

β

正義の味方になりたかったつもりはない。でも僕は、いつも自分が正しいと思った行動をとってきた。
女の子をいじめる同級生からその女の子を庇ったのは、僕が正しいと思ったからだ。その結果、僕が学校と世間から孤立したのも、別に悪くはない。僕は正しいと思った行動を取ったに過ぎないのだから。
その末路が、同級生を醜い肉塊としか呼べない物へと変えてしまった現在へと繋がっていても。
でも、心に後悔がないとはいえない。彼や彼女、そして僕のため

に、他に別の方法もあったかもしれないから。
しかしそれは、いざやってしまった今だから言えること。
だから、
「きみ、何をしようとているんだい？」
「――！」
僕は今、ここに立っている。
「なんだ、ガキか……。おじさんは今、大事なお仕事の真っ最中なんだ。邪魔しないでね」
「人の住宅に油をまくのが？　変わったお仕事だね」
目の前に立っている中年の男性の顔色が、急に変わった。
「てめェ……いつから見てた！？」
血相を変えて怒鳴る中年。僕はそんな様子を見つめて、少し悲しくなった。
「きみが三軒目の放火をしていた時だよ」
僕の発言を聞いた彼は、ポケットからナイフを取り出して、僕に向けた。
「てめぇ、チンコロする気か？」
「しないよ」
「まさか、既にやったんじゃないだろうな！」
「してないよ」
「そうか……」
彼は、僕に刃物を向ければいいとおもったのか、僕の首を狙うようにその小さなナイフをかざし、
「なら、悪いがここで死んでもらうぞ」
嫌な笑いとともに、じりじりと歩み寄り始めた。
彼が、手を伸ばせばナイフが僕に届くくらいの距離にまで近付いたとき、僕の後ろに隠れていたアラルから、天叢雲の鍔を受け取った。
「機動（ウェイクアップ）・天叢雲剣（あまのむらくものつるぎ）」
そう言った僕の右手に、アラルがしがみつき、そこに天叢雲剣が

現れた。
「なっ……！？」
その間、およそ二秒ほど。ほぼ突然に近い速度で現れた天叢雲を前に、中年の男性はたじろいだ。
「そんな小さなナイフで、僕が慄くとでもおもったのかな」
僕はそういいながら、彼に天叢雲の刃を向ける。彼はまた血相を変えて、右手からナイフをこぼれ落とした。
「わ、わかった……、降参だ……っ」
彼は後ずさりしながら、僕から距離を取る。
「ふぅん？」
僕は、天叢雲の現出時に僕の左腰に現れた鞘へ、それを収める――
「――なんてな！」
――フリをした。
中年がジャケットの内側から拳銃を取り出して、その銃口を僕に向けて引き金を引いた。
けど、
「無駄だよ」
その弾丸は、僕の目の前で真っ二つに切り裂かれた。
「なんだと！」
彼は慌ててさらに数発の弾丸を穿つ。けど、その全ては先ほどのように、真っ二つになって僕の足元に落ちる。
「てめェ、一体何を……っ！」
彼は何かを言いかけて、やっと僕の手元に気が付いた。
「まさか、全部斬ったのか？」
「まあね」
そう。僕は彼の弾丸が僕にせまるまでの間に、天叢雲でその全てを斬ったんだ。一発目は居合い、そのほかは全て太刀で。
「そんな、だがその剣には弾痕もないし、空気を切る音も……」
「弾丸と君が、低レベルなんじゃないかな？」
「――っ！　なんだとこのォ！」

さらに数発の弾丸を撃つ彼だけど、僕はそれが全て見えるし、斬れる。右腕一本動かすだけで、簡単に斬れるからね。
「くっ、弾丸切れかよっ！」
「気は済んだかい？」
彼が意味もなく銃の引き金を引くけど、そこからはもう弾丸は出ない。そんな様子をみた僕は、天叢雲の切っ先を彼に向ける。
「ま、参った！　マジで！　頼む、い、命だけは……！」
両手を挙げて必死にそういう彼だけど、僕は最初から、聞く耳など持っていない。
切っ先を一度振り上げた僕は、その空間ごと彼を斬った。
「君が火をつけた家の中には、そんな命乞いも出来ずに逃げ遅れて死んだ人もいるんだ。今更虫が良すぎるよ」
同級生を斬った事に苦しみを覚えたのに、それが他人で凶悪犯だからという理由で簡単に絶つことが出来た僕が、言えることではないのかもしれない。
ただ、僕はこの正面の肉塊を、かつての姿を思っていたわることは出来なかったのは確かだ。また一人、僕は僕の正しいと思った行動で、人を殺めたんだ。
悔いは微塵もない。これは正義なのだから。

結合／捜索

α

「のわ――――――っ！」
我ながら情けない叫び声を上げながら、突き飛ばされる俺。
「ほらほらいくよ！　パルテノ勝負！」
チャイナドレスを翻しながら、なにか長い棒のような物を何度も俺に突きつけてくる少女。俺はそれを必死でよけ続けていたが、やがてその一撃が俺の腹に当たって、吹き飛ばされたのだ。
「げ、げほっ、……くそ！　何なんだ一体！」
壁にぶつかるも、なんとか体勢を立て直す俺。そんな俺にタスラムがよって来た。
「マスター！　はやくわたしの母体を出して！」
「マスターじゃねぇし！」
「そのネタはいいから、早く！」
ネタじゃねぇよ！　ホントに違ぇよ！
「このままだと、マスターが殺されちゃうよ！」
とはいえ、タスラムの顔は本当に焦っていた。心配してくれるのは嬉しいが、
「母体？　母体って、何だ？」
「トルクだよ！　ルーのトルク！」
トルクだぁ？
「どこにあるの！？」
「知るかよ、トルクってそもそも何なんだ？」
「ほら、キラキラしてて、首に巻くやつ！」
その説明では全く分からん。
「早く結合（コンタクト）しないと！」

会話がかみ合わなくなったような気がしたとき、
「時代を考察して、ネックレスという単語が相応と判断した」
それまで黙っていたブリューナクがそう言った。なんと言ったかは分からないが、とりあえず「ネックレス」という言葉は聞き取れた。
「ネックレス？　ネックレスなら俺は持ち合わせていな――」
いいかけて、思い出した。そうだ！　今日涼子からもらった奴がある！
「――あれか！　あれなら！」
確か、寝る前に居間に置いといたハズだ！
「いつまでゴチャゴチャ話してるのさ！」
と、それまで黙って待っていてくれたらしい少女が、その長い棒を振りかぶって、俺に向かって振り下ろしてきた。俺は文字通り転がるように、その攻撃をよける。
その勢いで襖を破り、そのまま十畳ほどの居間へと転がりぬけることが出来たのは、我が家が和風住宅であったためだ。オヤジのセンスもたまには役に立つものだ。
飛び込み前転のように転がり始めた俺は、そのままごろごろごろごろと何度も転がり続ける。やがてその先にあった、金色のネックレスが入ったケースの元へとたどり着いた。
「よし、コレだな！」
俺がそのケースをタスラムに見せると、
「うん！　それ！」
確認が取れた。
「それを首にはめて、「ウエイクアップ！」って叫んで！」
なんとなく、嫌な予感がするのだが……。
「がぅ！？　やらせないよ！」
「うぉっと！」
横からせまってくる長い棒を避けて、俺はそれを首につけた。
「ウエイクアップ！」

そして、叫ぶ。
途端――

β

遅いなぁ……。
「わかほ、何してるんだろう？」
誰ともなしに呟く僕。放火魔と出くわしたのは偶然だったけれど、その偶然は、僕がわかほの姿を探して歩いていたからなんだ。
僕らの生活では、基本的に夜間の行動が多く、買い出しといってもコンビニで食料を調達するぐらいしかやる事はないはず。
「寄り道とか、じゃないかな？」
僕の肩の上で、アラルがそう呟く。
「うーん……。ただの寄り道だといいんだけど……」
僕らが住処としている廃墟の倉庫からは、最寄のコンビニまでほぼ一本道だから、すれ違うことはない。
なのに、もうそろそろそのコンビニが見えてくるところまで歩いてきてしまった。いき道ですれ違わなかったところを見ると、やっぱりアラルの言うとおり、どこかに寄り道しているのかな……？
なんて考えていると、
「あ、ねぇセイジ！　あれ！」
「うん？」
アラルが、道端に何かを見つけた。
「っと、コレは……」
例のコンビニのものと、一目で分かるほど特徴的なビニール袋。
中身は……飴玉が半分を占めてる。
こんな買い方をするのは、わかほ以外に思いつかない。
「わかほ？」
辺りを見回してみるけど、この近くにわかほの姿はないみたいだ。

「大事な物をおいといて、一体どこに行ったんだろう？」

α

「……あれ？」
どうしたんだ？　言われたとおりにしたのに、何も起こらないぞ？
「がぅ、何も起きないの？」
目の前の少女も、俺の様子を窺っている。……なんか、武器とか出ないのか？
「がっびーん！　だましたなーっ！」
「のわっ！」
持った棒で更なる突きを繰り出す少女。俺は寸でのところでそれを避けて、距離を取って走る。
「くそっ、どういうことだタスラム！」
俺はタスラムの姿を探して首を動かすが、その近くにタスラムの姿はない。
あれ、どこに行った？　俺がそう心で呟いたとき、
『わたしはここだよ』
「のわっ！」
突然、頭の中から声がした。
『今わたしは、リントのトルクの中にいるの。そしてこのトルクが、わたしの本来の姿「太陽弾タスラム」なの。詳しいことはあとで話すから、今はとりあえず、戦い方を先に教えるね！』
「戦い方だァ？」
とはいえ、この状況を打破するには、それは必要なのかもしれない。
「よし分かった！　教えろ！」
どことなくそう言う俺。もしかしたら心の中で言えば伝わるのかもしれないが、今はそんなことはどうでもいい。二つ隣りの寝室で

は、多分今もずっと眠っている涼子がいるはずだ。アイツまでこんな事に巻き込みたくはないし、そのためにはあの少女をとめないと！
『わたしは装着タイプの武器で、持ち主の意思で三種類の火の玉が出せるの』
火の玉？
『まず、右手から赤い球を出して！』
出すって、どうやって？
『イメージするの。赤い球が、リントの体からもわーん、って！』
「イメージ……」
『このとき、「イーグル！」って言いながらやると、作りやすいよ』
「えっと……　イーグル！」
軽く叫びながらイメージを浮かべると、そこには赤い色の球が現れた。
『そう！　それで、その球をあのこの武器にぶつけて！　コレもイメージだよ！』
ぶつけるイメージ……。
俺が思い浮かべた途端、その球は、眼前の少女がもつ長い棒にぶつかった。
「ひゃあ！」
すると、球が破裂して、少女を吹き飛ばした。少女はそれでも地に足をつけて、なんとか踏ん張る。
「がぅう、びっくりしたぁ！」
その、一連の流れを見た俺は、
「おお、すげぇ……」
そんなのんきなことを呟いた。まさに超能力者ってかんじだな、これ。
「がぉう、まだまだー！」
「おっと！」
眼前の少女が体勢を整えて、再び突きを繰り出してきた。俺はそれも、住んでのところで避ける。

「がぅー！　さっきからよけてばっかりじゃん！」
少女は腹を立てたのか、地団駄を踏んで俺を睨む。
「もういいっ！　キコイ！」
「あいよ！」
そして、持っていた武器を床に置いて、そのまま拳法のような構えを取る彼女。落ちた棒から変な声がしたかと思うと、その棒はとても小さな物になって、意思を持ったように彼女の耳に挟まった。
「がるぅ！」
そして、少女は俺の顔めがけて拳を繰り出した。
「おっと、イーグル！」
俺はその少女の拳の前に、先ほどの赤い球を生んだ。この球を身代わりに、爆風で吹き飛ばしてやる！
――つもりだったが、
「ひゃあー！」
「のわーっ！」
俺まで吹き飛ばされた。壁にぶつかって背中が痛い。
『あ、イーグルは炸裂弾だから、何かにぶつかるとはじけるの。その範囲は広いから、使うときはちゃんと注意してね！』
「最初に言って欲しかったザマス！」
オヤジの癖が出ちまったが、まあそこは無視。

終戦／洗脳

β

――見てられんな――

っ！

僕の頭の中で、そんな声が響いた。

「またアンタか！」

――人間の分際で、私の事を「アンタ」などと呼ぶとはな――

「うるさいっ！　勝手に人の脳内にへんなものを押し込んだのは、アンタじゃないか！」

――自身が生み出した存在に手を加えて、何が悪い？――

「わるいさ！　人権問題だ！」

――理解できぬ。何故お前達人間は、そうまでして個々の意思を尊重する？――

「理解できないなら理解しなくていいさ、でも、理解できないのはアンタが、人間を自分の作ったおもちゃ程度にしか考えていないからだってこと、忘れるな！」

――口の聴きかたに、気をつけろ！――

「うっ！」

僕の頭に激痛が奔る。

「セイジっ！」

アラルが青ざめた顔で僕を見るけど、僕はあまりに激しい激痛に唸ることしかできない。

――私に逆らうからだ――

激痛の正体はわかっている。僕の頭の中を、「彼」が締め付けているのだ。見せしめと言わんばかりの、まさに絶対の神の力。

――私はただ、助言をしに来ただけだ――

「助言……？　アンタが、僕に……？」
激痛のせいで言葉が途切れる僕。そんな中で「彼」が呟いたことは、僕の予想外の事態を知らせた。
――頭屋わかほという個体が、ジークフリードと対峙している――
「っ！　なんで！？」
――功を焦ったのだろう。ブリューナクが、ジークフリードをマスターに選んだのだ――
そういいながら、僕の脳への干渉を絶つ「彼」。僕はそっちは気にせず、彼の言った言葉を飲み込む。
「くそっ、母体はこっちが持ってるのに！」
――ルーも、厄介な真似をしてくれた。まさか、本来一つの武器に一人しか付けられぬ妖精少女を、タスラムの能力を応用して別の妖精少女と同伴させるなど……――
「とにかく、あの子がジークフリードとまともに対峙できるわけがない！　一刻も早く、わかほを助けないと！　場所はどこ？」
――私が、お前に教えるとでも思ったのか？　滑稽だな。人間風情のために、わざわざ私の力をもって得た情報を与えるつもりはない――
「じゃあどうするんだよ！　アンタだって、わかほを失うのは痛手のはずだよ？」
――そんなことは分かっている。だが、私はいささか、この手段を行使するのにためらいを感じるのだ――
「手段？」
――ふむ、だがコレが最も合理的だろう。感情で躊躇うのは、人間だけで充分だ――
その言葉を脳内で聞いた途端。僕の意識が消失した。

α

『次は青い球をイメージして！　シャークっていいながら、ふわふわのイメージ！』
吹き飛ばされた俺が体勢を立て直す時、タスラムがそう俺に言った。
「ふわふわのイメージ……、シャーク！」
言われたとおりにやってみると、右手から今度は青い球が出てきた。
『それは、さっきみたいな時に使うの』
さっきみたいな時というと、球で弾こうとした時か。
「がるー！　あたしはあんなのでやられないぞ！」
体勢が整ったのか、少女がそういいながら俺に拳を向けてくる。
俺はその拳に、ためしに青い球をぶつけてみた。
と、
「がぅ？　な、なんだこれ！」
青い球から触手のような物が出てきて、彼女の腕を縛りつけた。
勢いを失った彼女は、腕を宙に持ち上げたままの不恰好な姿となる。
『シャークは拘束弾で、ぶつかったものに張り付いて、動きを止めるの』
「なるほど」
俺がタスラムの言葉に納得していると、
「がおーっ！　……あ、とれた」
シャークと呼ばれた青い球の触手がちぎれ、先ほどの少女が腕の動きを手しかめ始めた。どうやら強度はそんなに高くないらしい。
「がるー！」
彼女はそういいながら、今度は左拳を俺に向ける。
『リント、今度は黄色い球！　きゅるきゅるのイメージで――』
「パンサー！」
俺は当てずっぽうで、球の名前を叫んでみる。と、そこにちゃんと、黄色い球が現れた。……まさか、本当にでてくるとは。赤でイーグル、青でシャークだからといって、黄はパンサーだという事に

繋がったのは、偏に俺が、オヤジの偏った教育を受けていたからなのかもしれない。三十年も前の某特撮番組の組み合わせだからな。
その球は、俺が少女の左拳を右腕で弾いた時、そのタイミングで自我を持ったように彼女の脇腹にぶつかる。
「きゃっ！」
少女はその衝撃で、少し体制を崩した。
『パンサーは誘発弾で、主人が敵と判断した物が近付くと、自動的にその人にぶつかりにいくの』
俺の中で、タスラムが解説してくれた。どうやら本当に「パンサー」という名前は正しいらしい。
「がるーっ！　もう、へんな球ばっかりで嫌になっちゃう！」
「悪いな、どうやらコレが、俺の戦い方ってヤツみたいでさ」
俺は改めて自分の右手を見る。未だに信じられないが、この手から三種類の光の球が生まれたんだ。これはもしかしたら、もしかするかもしれない。
「がるる！　まだまだ！　あたしは頑張れるよー！」
「俺だって、自分の身くらいは自分で守るぜ」
ついでに、同じ屋根の下で今もすぅすぅと寝息を立てる涼子もな。

三種の球による攻防を繰り返す俺は、遂に襲ってきた少女を追いつめて、その目的を白状させるに至った。
「降参しろよ、俺はお前に危害を加えるつもりはないからさ」
両手足をシャークという青い球で壁に貼り付け（一個では足りなかったので四肢の関節部分に貼り付けた）、その眼前にイーグルを二発、空中に待機させている。……我ながらよくこんなことが出来た物だ。
「がうぅ……。せっかくブリューナクを見つけたと思ったのにぃ……」
そのブリューナクは今、先ほど俺たちがいた、隣の台所からやっ

と姿を現した。どうやら戦いのあいだ、ずっと見ていたようだ。
「そういえばさっきもそんな事を言っていたが……、お前はブリューナクを探していたのか？」
俺がそう問うと、少女はぷいとそっぽをむいて、
「ふーんだ、教えてあげないもーん」
子どもがすねているかのようなその態度に、俺はすこし苛立つ。
「……まあいい。とりあえず見逃してやるから、もう来るな。改めて言うが、俺はこいつらのマスターでも何でもないし、その「パルテノなんとか」っていうアホくさい戦争に参加するつもりもない」
俺の発言がよほど想定外だったのか、眼前の少女は「えっ？」と呟いて、
「でも、コンタクトしてるじゃん」
「成り行きだ」
俺だって、好きでこんな事になっているわけじゃない。とりあえずコイツを追い払うのが先決だと思ったからであって、その先は傍観者となるだけだ。
そう付け足そうとしたその時、
「「なんだ、もう終わっていたのか」」
突然、少女が入ってきた窓から、一陣の風が吹いた。
「「これでは、助力する必要もなかったか」」
その正体は風ではなく、一人の少年だ。左腰に大きな日本刀を下げて、翡翠の髪が逆立っている。声そのものは少年のそれだが、口調からはどこか、絶対の威厳を感じる。
「だ、誰だ！？」
俺がその言葉を発せたのは、その全てを把握した時だった。
その傍ら、
「ゼ、ゼウス……？」
縛り付けられた少女が、驚きに満ちた声色でそう呟く。……ゼウス？　この少年の名前か？　見たところ同年代の日本人に見えるが……。

「「頭屋わかほ。「お前という存在には、聊か単純なところがある」と、前にも教えたことが有る筈だが？」」
少年はそんな彼女を睨み、その彼女は何も言えずにうつむく。
「がぅぅ、ごめんなさい……」
「「……ふん、まあいい」」
少年は彼女から視線をそらし、それを俺へと向けた。
「「ジークフリード……いや、九条凛人よ」」
「な、何だよ？」
名前を呼ばれただけなのに、何故か足元が震えそうになった。なんだこの、殺気にも似た威圧感。なにか、目の前の少年の背後に、とてつもなく大きな存在を感じる。むしろこの少年は、本当に人間なのか？　まったく根拠も何もないが、もっと大きな存在じゃないかと思ってしまう。
「「……ほう、一瞬で私の力を感じるとは。感覚的とは言え、ジークフリードの転生固体という事実は伊達ではなさそうだ」」
「――っ！？」
一瞬、彼の目が俺の中に入ってきたような気がした。俺の体の中で目が開いて、俺地震を内面から把握されたような感じだ。
「「戦闘技術も素人のそれとは比較にならん。先天性の才がこうも力となるとは……。ルーの考えることは、一向に理解できぬ」」
「な、なんの話だ？」
「「おっと、気にするな。私の勝手な独り言だ」」
俺の問いに少年はそう答えて、一度とナリの少女を見つめてから、
「「さて。簡潔に言うが、頭屋わかほは返してもらうぞ。これはこれで、利用価値がまだあるからな」」
「かしらや、わかほ……？」
「「ああ、名乗っていなかったのか。そこの単純な小娘のことだ」」
ゼウスという少年が再び視線を少女に向けたため、俺はなんとなく理解した。そうか、この少女が「かしらやわかほ」なのか。
「……まあ、俺としては、特に何の問題も無いし、むしろその方が

ありがたいんだが……」
「「ほぅ、今度のジークフリードは捕虜を取らぬのか」」
さっきからちょくちょく「ジークフリード」という単語が彼の口から出てくるが、それはどうやら俺の事を言っているらしい。名前の響きが似ているのは分かるが……。
「「なに、こちらとしても好都合だ。……どうだろう、この場は休戦という形で手を打ってはくれぬか」」
疑問系のような台詞だが、その声はまるで「俺に選択の余地はない」といわんばかりの物だった。だが休戦というのは好都合だからその提案には乗ろう。
とはいえ、休戦ではなく終戦だがな。
「がう！　まってよゼウス！」
だが、わかほという少女は、その事態に納得しない様子だった。
「あたしはまだ戦えるよ！　勝手に終わらせないでよ！」
彼女は動かない手足を動かそうとするが、俺のシャークによって縛られているためにそれもままならない。
が、ゼウスという少年はあくまでも、
「「お前には言っていないぞ、頭屋わかほ」」
そう言った途端、俺の全身に怖気が奔った。その言葉そのものは俺に向けられていないというのに、まるでいたずらをした後に誰かにバレた時のような、そんな感覚がした。……いや、それよりももっとキツイものだ。
「「して、如何（どう）するのだ九条凛人」」
名前を呼ばれて、今度はその怖気が治まる。
「あ、ああ……。それで構わないぜ……」
「「よし。ならば先ずは、わかほの拘束を解いてもらおう」」
言われて、俺は気が付いた。そういえばこのシャークの解き方を俺は知らない。俺の意思で動いたのだから、俺が「消滅しろ」と念じればいいのか？
試しに念じてみると、わかほを縛っていたシャークが解けていく。

これで正しかったようだ。
「「ふむ。今回のジークフリードは聞き分けがいいな」」
ゼウスがそう呟きながら、その指をくいっと曲げた。と、わかほの体が浮き、彼の元へと浮遊していく。わかほは抵抗する素振りもみせず、ただゆっくりと彼の元へとたどり着く。
「「では此方も、ここで退散するとしよう」」
そういった彼の頭上に突然、金色の円が浮かんだ。
「「次に会うときは、この私と対峙してもらうぞ」」
円が彼の体を包むと、その位置から彼の体が消えていく。
「「尤(もっと)も、その時対峙するのは、私ではなく門矢星次だがな」」
その言葉が聞こえたかと思うと、すでにその場に、ゼウスとわかほの姿はなかった。
「……なんだったんだ？　一体……」
そう呟く俺の体には、どっと疲れがわいて出る。
そうして自分の体を改めて見つめ、今更ながら気付いた。
「そういえば俺、涼子から抜け出した時に服脱いだんだったな……」
それまで俺は、ハーフパンツと白シャツという、おおよそ季節はずれな格好をしていたのだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6871z/

天蓋のパルテノン

2012年1月12日23時51分発行